

氏名	山本 野理子
学位の専攻分野の名称	博士（芸術学）
学位記番号	甲文第95号（文部科学省への報告番号甲第355号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2011年3月3日
学位論文題目	東海道中を描く錦絵の新展開 —「御上洛東海道」を中心に—
論文審査委員	（主査）教授 永田 雄次郎 （副査）教授 河上 繁樹 教授 森田 雅也

論文内容の要旨

山本野理子氏の学位申請論文「東海道中を描く錦絵の新展開—「御上洛東海道」を中心に—」は、江戸幕府第十四代将軍徳川家茂（1846～1866）の文久3年（1863）2月の上洛を描いた、同年4月より刊行された錦絵シリーズ「御上洛東海道」（「東海道名所風景」、「行列東海道」とも呼ばれる）の制作動機、絵画分析、政治状況との関わりなどを論究したものである。絵師16名、総数162図の「御上洛東海道」に関して、ほぼ同時代に描かれた「末広五十三次」、三枚続錦絵と比較することによって、本作品の特徴をより明確にし、明治時代の錦絵の方向づけについて考察している。

「はじめに」においては、「御上洛東海道」は伝統に基づく東海道絵と将軍上洛が組み合わせられたものとして、幕末の錦絵にあって、あまり研究されてこなかった意味を問っている。当時の風俗、政治状況を考慮すれば、注目されるべき作品にもかかわらず、その図の多さなどから研究が遅れていたことを指摘する。

「第一章 江戸時代の出版における風景表現について」では、広重の「東海道五十三次（保永堂版）」に代表される東海道シリーズの歴史を追い求めている。特に、図様の中で大きな役割を持つ東海道名所の成立について論じる。当然のことながら、『伊勢物語』の東下りをもっとも古い例としながらも、その名所の成立にあたっては、17世紀前半に著された、『伊勢物語』のパロディーでもある『竹斎』の挿絵の重要性を説く。その存在が、同世紀後半の東海道名所絵の萌芽である『東海道名所記』の挿絵につながり、東海道を京に下る時に用いる実用的意味を持って庶民に広がったと考える。この流れが『東海道名所図会』（1780）を生み出し、挿絵入り地誌の集大成となり、その図様は北斎に直接影響を与え、風景版画の盛行につながるとした。

「第二章 「御上洛東海道」—その報道性と虚構性をめぐって—」は本論文の中心ともいえる章である。文久3年（1863）の家茂上洛は陸路→海路→陸路と目まぐるしく予定が変更された。最終的には陸路となるが、この上洛は江戸の庶民にとって関心も高まったが、その上洛の様を錦絵に表現しようと浮世絵業界は考えた。参勤交代ではなく将軍自身が東海道を歩むという点で、従来の東海道中絵のマンネリズムを打破する一大イベントとして版元はそのシリーズを企画した。そして、このシリーズは絵師16名、作品数162図、版元も複数で制作された。そこで全体的な統一感にはやや欠けるが、二代広重が制作の中心的絵師になることによって、初代広重の伝統を継承してもいると論じる。ただし、東海道の宿場を連続して描くのではなく、ある地域をゾーン化して表現する特徴を示すことにもなった。

描写内容については、『続徳川実紀』に基づく報道性と、例えば現実にはその地を通過しなかったにも

かかわらず、伝統的な東海道中絵でもっとも有名な桑名の七里の波を画面に加えるなどの虚構性の組み合わせを考察している。さらに、幕府の事情に直接触れる家茂の姿を頼朝に仮託することで、筆禍を避ける工夫などもその虚構性の問題を考える上で重要だと指摘している。

「第三章 東海道名所錦絵の行方」では、「御上洛東海道」の継承として、慶応元年（1865）の家茂第三回目の上洛を描いた、同年閏5月刊行の「末広五十三次」を考察することに始まる。特に政局報道を中心にしつつ正確な報道よりも、より速度を求めた浮世の絵（錦絵）としての作品制作に注目し、短期間で完成した「末広五十三次」には、武装集団としての大名行列の中に、伝統的な親しみのある東海道の風景を組み合わせが見られることを強調している。ただし、家茂と頼朝（笹竜胆）の関わりにおいては、「御上洛東海道」と共通すると論じる。

一方、「御上洛東海道」と同時期の、特に、文久3年2月から4月に大量に制作された家茂の上洛を描いた三枚続錦絵にも触れている。三枚続という大画面に、東海道の風景を一つのパノラマとして描き、新しい時代感覚の錦絵の誕生について考究し、明治時代への東海道錦絵移行を取り上げる。

家茂の上洛という報道が庶民にも行きわたる点で、幕府の力の弱まりを見、出版規制のなしくずしの緩和という幕末の時局の中に、伝統的な東海道を描く方向との組み合わせ、家茂を頼朝に仮託する姿勢等、今まで論じられることの少なかった幕末の東海道錦絵について、本論は、新たな展開を示している。

論文審査結果の要旨

山本野理子氏の学位申請論文「東海道中を描く錦絵の新展開―「御上洛東海道」を中心に―」は、江戸幕府第十四代将軍徳川家茂の文久3年（1863）2月の上洛をめぐって、同年4月より7月に刊行された錦絵シリーズ「御上洛東海道」の制作動機を解明し、他作品と比較検討することによって、美術史的意義を考察した新鮮で堅実な論文であると評価される。

第一章で、江戸時代の東海道名所の成立を、『竹斎』、『東海道名所記』、『東海道名所図会』を用いて論究する姿勢は妥当であるが、その根本となる粉本をどこに求めるべきか、前述の史料以外にも研究の範囲を広げる必要性が指摘された。『竹斎』などについては、最新の日本文学研究にも触れることが重要であったと思われる。さらに、江戸の庶民は嵯峨本などでその風景について知識を得たことに注目すれば、より論が大きく展開したであろう。しかし、本論はその成立過程を時代順に論理的に追求していることで、十分に説得力は有している。

第二章では、「御上洛東海道」の成立について、錦絵作品として刊行される時間（速度）を考え合わせて考察する。当時、本シリーズは、浮世絵界の中心である歌川一門を挙げて、従来の東海道を描く錦絵の図様を意識しながら、家茂を頼朝に仮託して、両者の組み合わせによって、江戸庶民に人気のあった家茂の上洛を描いた新しい東海道中絵とする論は鋭敏である。

この刊行を一大イベントとしつつ、家茂を頼朝に仮託することによって筆禍を避けていることを指摘し、それは同時に幕府の出版規制の弱まりと考えながら、その報道性と虚構性の意味を解明しようとしている点も興味深い。ただし、幕府にとっても、家茂の上洛は庶民に対する権力誇示政策で、あったことは、もう少し強調すべきではなかったのだろうか。

このシリーズを制作した16名の歌川派の絵師についても丹念に調査し、『続徳川実紀』によって上洛の様子を詳細に記すが、錦絵シリーズとしてのまとまりについて更なる絵画的分析が必要であったのかも知れない。加えて、絵師の中で、例えば、後年河鍋暁斎となる惺々周磨などの個性的表現についてもここで少しく、検討してほしいかと考えている。しかし、これは今後の課題でもあろう。

第三章は、「御上洛東海道」刊行後、第3回目の家茂の上洛を描いた「末広五十三次」との比較に始まる。

「御上洛東海道」に比べ、やや保守的な東海道風景に、笹竜胆紋の家茂を組み合わせる手法は両者に共通していると考えつつも、「末広五十三次」は今まで考えられなかった武装軍団としての大名行列と判断するところに新しさを感じる。

本章でより注目すべきは、「御上洛東海道」とほぼ同時期の家茂の上洛を描いた三枚続錦絵についての論述である。三枚続きのパノラマ的大画面の風景の出現を、新しい時代感覚を持つ錦絵と考えており、東海道中の風景において、この視点からのさらなる研究が期待される。

現在、この研究に対する先行研究は少ないとはいえ、広重「東海道五十三次（保永堂版）」からの伝統の中に、いかに「御上洛東海道」が位置づけられるのかをより詳しく論じる必要性も認められようか。だがこの論文は、従来、研究が遅れていた本シリーズについて、堅実ながらもこれまで論じてきた多様な視点から考究の光を当てた独創的な論考であるとも考えられる。以上、提出論文審査委員3名は、論文審査、2011年2月17日の口頭試問および公開発表会の結果、山本野理子氏が本論文によって博士（芸術学）の学位を受けるに値すると判断して、ここに報告する次第である。